

Barn-Raising Tuesday

な や けんちく か よう び 納屋建築*の火曜日*

ある火曜日の朝のこと。アーサーは、日の出と共に目覚めました。めずらしいことです！ この火曜日は、ただの火曜日ではありませんでした。納屋を建てるための特別な火曜日だったのです。

何週間もの間、ピークビューバレーの人たちはみんな、サンセットヒルに納屋を建てるための準備をし、そのための資材を集めてきました。かじ屋も、修繕屋も、お店の主人たちとその家族も、牧場主も、その奥さんや母親たちも、みんな、木材やら干し草やら金づちやら釘やらを持ち寄って、ピークビューバレーで今までにないほど最高の納屋を建てようとしていました。そして建てた後は、日がしずむまで、みんなで食べて飲んで、おどって祝うのです。

アーサーも、初めて手伝える年になりました！

あっという間にアーサーは着替えて、ドアの外に飛び出しました。すでに何台もの荷馬車が、近くの丘をガラガラと音を立てて登っています。家族ぐるみの人たちはピクニック用のごもを持って、楽しそうに歩いています。アーサーは全速力で走り、ほとんどの荷馬車を越して、丘のてっぺんにたどり着きました。

真っ先に、食事用のテーブルがアーサーの目に飛びこんできました。

村の女の人たちは、もう何日も前から、いろいろな料理をオープンで焼いて準備してきたにちがいありません。きれいなチェック模様の布の下からは、まさにごちそうそのものにおいがただよってきます。アーサーは、キャセロールやパンやチーズやパイや焼き菓子などが延々と並んでいる光景を思い浮かべました！ 特に、アンソム夫人の評判のダブル・デック一・ラズベリー・ブラウニーは楽しみでした。アーサーは目を閉じ、鼻にしわを寄せて、この名立たるブラウニー姿なくして納屋を建てることを想像してみましたが…。それは無理というものでした。

食べ物ののったテーブルににじり寄ると、アーサーは食べ物におおいかけてあるふきんの方に手をのばしました。すると後ろから、聞きなれた村のパン屋さんの声がありました。

やくちゆう さんこうまめ ちしき な や けんちく ふる
*訳注・参考豆知識：納屋建築：古くから
アメリカの農場地域では、納屋を建てる
ときに多くの人手がいるため、だれかの
納屋を建てる時には、地域のみんなで
協力して建てていた。終わると、共に飲
食をして祝った。
やくちゆう さんこうまめ ちしき
*訳注・参考豆知識：アメリカでは「スー
パー・チューズデー」、「ミニ・チューズデー」、
「ミニ・スーパー・チューズデー」と
いうのがあり、大統領の予備選挙や本
選挙の投票日は火曜日と決まってい
る。それはもともと、昔の開拓時代から
行われていた選挙がキリスト教徒によ
るもので、日曜日は安息日だったため、
広大な土地に広がって住んでいた国民
が遠くから投票をしに来る場合、安息日
を過ぎた後の翌日に出発しても間に
合うように、火曜日になったことから。こ
の物語の中では、納屋を建てるのがと
ても大切な日であることを示している。



村のパン屋さんが指をふって、最高に低く重々しい声(ふつうは、むてっぽうにも彼の庭を横切ろうとする子どもにしか発しない)で言いました。「アーサー、食べるのは後だぞ。今日はみんな、それぞれ分担された仕事があるはずだ。まず、納屋を建てるための自分の役目を終わらせることだ。そうしたら、フォークを手にしてもいい。…その前ではなくてな。」

やがて、みんなが到着し、男の人たちが納屋を建て始めました。アーサーは、彼らが納屋の骨組みを作るのを見ていました。一人一人が、それぞれ自分の役割を知っていて、それを立派に果たしていました。そして、骨組みはあっという間に出来上がってしまいました。

そして、アーサーの出番になりました。納屋の壁になる部分に釘を打ちこむ仕事です。最初の内は、楽しみながら1本1本、打ちこんでいました。今までにしたことのある中で最高に楽しい作業とは言えないかもしれませんが、大切な仕事の一部を担うというのは、気持ちのいいものでした。

腕を休めながら、ふと肩ごしにさっと辺りを見回すと、骨組みを作り終えた男の人たちが、テーブルの周りに集まって、食べているではありませんか！ アーサーは口をぽか～んと開けて、お皿に食べ物が盛られるたびにどンドン平らげられていくようすをながめていました！ 男の人たちは、テーブルからテーブルへと、食べ進んでいました。チーズをもぐもぐ食べ、お肉のパイをぱくぱく食べ、ビールをぐいっと飲み、じりじりとアンソム夫人のブラウニーが出されているデザート用テーブルに近づいていきます！

アーサーは、自分の分担された仕事である納屋の壁を見ましたが、まだ半分しか終わっていません。一体あとどれくらいかかるんだろうと思いました。「そんなに長く待ってなんか、いられないよ！」アーサーはつぶやきました。

そのしゅんかん、考える間もなく、アーサーはすでに作業スピードを上げていました。釘をあちこちでためめに打ち、ずさん*な仕事ぶりで、曲がっている釘もたくさんありました。割り当てられた仕事はあっという間に終わり、アーサーはブラウニーの列に一直線です。その数分後には、お気に入りのごちそうをほおぼっていました。むだにした釘や、ずさんな仕事のことで、すっかりわすれています。

*ずさん:あちこち手をぬいて、いいかげんなようす。



事実、市長さんの声が聞こえてくるまでは、納屋があることさえ、わすれていました。市長さんが立ち上がってさげびました。「今度は、いよいよ納屋の最終段階に入ります。屋根です！」

納屋の壁に重いはしががかけられ、最もたくましい男の人たちが、巨大なカシの木材を上につ張りあげました。すると突然、

東側の壁のはしの方が、バリバリッと大きな音を立てて割れ始めました！ 男の人たちが四方八方に散ったしゅんかん、壁がずさまじい音を立ててたおれました。おがくずとカンナの削りくずが地面のほこりと混じって、大きな雲のように高く舞い上がりました。

そのこわれた部分直すのには、何時間もかかりました。その間、アーサーには考える時間がたっぷりありました。急に、アンソム夫人の評判のダブルデッカー・ラズベリー・ブラウニーが、そんなに大きな事ではないように思えてきました。

ついに納屋が完成し、お祝いが再開されました。アーサーは、市長さんがこちらへやって来るのに気付きました。が、アーサーの後ろには焼き菓子のテーブルが並んでいて、逃げ出せるような余地はありません。

市長さんはアーサーのそばへ来て、そのがっちりとした大きな手をアーサーの肩にかけました。

「なあ、アーサー。」 おこっているようなようすは全くありません。「納屋を建てる火曜日にこういうことが起きたのは、これが初めてではないんじゃない。」

「本当ですか？」

「そうなんじゃよ。」 市長さんは、目を輝かせてうなずきました。「昔々、君が生まれるずっと前の話だ。非常ににたようなことが、わたしにも起こった。ただ、あの時は、納屋が全焼してしまっただがね！」

アーサーは、賢い市長さんがそんなことをしたなんてと、鼻にしわを寄せて想像しようとしてました。

けれども、今度もアーサーには、そんなことは考えられませんでした。

「われわれはみんな、いつかは『納屋をめちゃくちゃにした』ことがあるものだ。」と、市長さんは言いました。「今君は、責任を果たすことについて、以前よりもずっと多くのことを知っているだろう。ということで、正式に、君を次の『納屋建築の火曜日』にお招きしよう。この次は、釘が今回よりもずっと、きちんと正しい場所に打ちこまれることだろう。」

アーサーは熱心にうなずきました。「はい！ ご心配なく！ 最後まできちんとやります。決して、すばやく終わらせようなんてことはしませんから！」

「君がよくやってくれるだろうことは、わかっておるわい！」 そう言いながら、市長さんは満面笑顔で、お祝いをしている人たちの方を見ました。「そしていつか、君もこの話をだれかほかの人に話してあげるといいだろう。」

アーサーは両足でとびはね、市長さんと同じくらい満面の笑顔で着地しました。アーサーは、自分が大人になって、背も高くなり、大きなひげを生やして、自分が納屋をめちゃくちゃにしてしまった日のことをだれかに話しているようすを想像してみました。「それなら想像できるぞ。」

お
終
わり

考えてみよう：君は、何かの仕事をやるたびに、最善をつくしてやるかな？ すぐれたことというのは、自分の目の前にある仕事は何でも最善をつくしてやることだよ。そして、すぐれたことへの報いとは、よくできた仕事に満足感を持つてるといことなんだ。

文：スティーブン・シュワルツ 絵：ゼブ

Copyright © 2010 年、ファミリーインターナショナル

"Barn-Raising Tuesday"—Japanese <http://www.mywonderstudio.com/level-2/tag/japanese>